ISSN 2758-0784

MUSEUM
THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter No. 59

December 2023

京都大学総合博物館 ニュースレター



特別展 蝶に会える日 ―村田泰隆コレクション展― （2 頁に関連記事）

特別展 蝶に会える日 ―村田泰隆コレクション展― 2
夏のスポット展示.....3
秋のスポット展示.....4
レクチャーシリーズの開催.....5
北海道石の常設展示への出陳.....5
日本建築学会大会（近畿）作品展 6
農学研究科コムギジーンバンク事業紹介展示.....6
博物館実習（館園実務）の実施 7
大地は語る 地球の脈動 宇宙の躍動 7
こども科学博 2023 のワークショップ 8
大丸京都店への出張子ども博物館 8
動物学博物館シンポジウム・ワークショップ.....9
招へい研究員 10
子ども博物館だより〈3〉.....11
総合博物館コレクション研究〈19〉.....12
研究資源アーカイブ通信〈28〉.....14
総合博物館日誌（2023 年 7 月～ 10 月）.....16

特別展 蝶に会える日 ―村田泰隆コレクション展―

Vol. 2 東南アジアが育んだ多様性

会期：2023 年 11 月 29 日（水）～ 12 月 24 日（日）

蝶の愛好家，研究家として知られる故・村田泰隆氏（元村田製作所社長）は，国内外の各地で蝶の観察と採集に取り組まれ，蒐集された標本は 17,000 個体以上，約 400 箱にのぼります。氏のご逝去後にあたる 2019 年，ご遺族のご協力を受け，大部分の標本を京都大学総合博物館でお預かりすることになりました。村田氏と親交のあった近藤高明氏と森浩一氏，および学生のサークル「京都大学蝶類研究会」の協力による整理とデータベース化を経て，コレクションは 2020 年に正式に寄贈されました［1］。

総合博物館では，これを記念した特別展「蝶に会える日　村田泰隆コレクション展」を複数回に渡るシリーズとして企画しています。今年 2 月の「Vol. 1 アゲハチョウの多様性」に続き，第二弾「Vol. 2 東南アジアが育んだ多様性」が，11 月末より 1 ヶ月間の会期で開催されました。

前回の Vol. 1 ではアゲハチョウ科をテーマとし，蒐集品の華やかな美しさや希少価値に焦点を当てました。Vol. 2 では貴重な資料としての価値をさらに活かすべく，学術的なトピックを中心に構成したいと考え，東南アジアの種多様性をテーマとした展示を企画しました。

村田氏のコレクションには世界各地のあらゆる分類群の蝶が収められていますが，今回の展示で特に注目したのがカザリシロチョウ属 *Delias* と，アゲハチョウ属 *Papilio* のカラスアゲハ亜属 *Achillides* です。どちらもインドからオーストラリアにかけての地域に多くの固有種が分布しており，島々の形成史に伴う種分化の歴史について興味深い研究がおこなわれています［2，3］。また，カザリシロチョウ属の翅には白と黒，そして赤や黄色の鮮やかな模様が見られますが，この模様が捕食者からの防御に一役買っているのではないかとする研究もあり［4］，美しいだけにとどまらない興味を秘めた蝶でもあります。蝶の美しい色彩を楽しむとともに，その背後にある長い多様化の歴史や，それを育んだ東南アジアの豊かな環境に思いを馳せられるような内容になっていれば幸いです。

前回に引き続いて準備にご協力いただいた村田麻里子氏，近藤高明氏，そして標本の維持管理に関わられた多くの方々のご尽力で今回の展示が実現しました。ここに改めて感謝を申し上げます。

（理学研究科 博士課程　上西 太朗）

[1] 土畑重人 . 2020. 総合博物館コレクション研究 <10> 村田泰隆氏コレクション ―日本のチョウ屋の底力―. 総合博物館ニュースレター 50: 6–7.

[2] Müller C. J. et al. 2012. Delving into *Delias* Hübner (Lepidoptera: Pieridae): fine-scale biogeography, phylogenetics and systematics of the world's largest butterfly genus. Journal of Biogeography 40: 881–893.

[3] Condamine F. L. et al. 2013. Fine-scale biogeographical and temporal diversification processes of peacock swallowtails (*Papilio* subgenus *Achillides*) in the Indo-Australian Archipelago. Cladistics 29: 88–111.

[4] Wee J. L. Q. & Monteiro A. 2017. Yellow and the novel aposematic signal, red, protect *Delias* butterflies from predators. PLoS ONE 12: e0168243.



図1　多様な種を収めたカザリシロチョウ属



図2　深い青の光沢が美しいアゲハチョウ属（カラスアゲハ亜属）

2023 年度 夏のスポット展示

魚の名前 いろいろな和名

会期：2023 年 8 月 9 日（水）～ 27 日（日）

夏休み期間中の 8 月 9 日から 27 日まで，当館では省スペースかつ短期間のスポット展示として，「魚の名前 いろいろな和名」を開催しました。生物の日本語名である和名は，その生物の形や色を他の動植物に例えたり，地名や時節，あるいは人名に由来するものもあり，その多様性に富んでいます。この展示では，特に魚類の和名に焦点を当て，その由来や意味について紹介しました。

展示期間は 3 週間にわたり，２～４個の展示ケースを使用した小規模な展示を行い，１週間ごとに展示内容を変更して実施しました。

初週はほかの動物にたとえた命名をテーマに，哺乳類に由来する和名を持つ魚類を展示しました。オオカミウオやネズミダラなど 6 種の魚類の液浸標本と共に，それらの和名のもとになったニホンオオカミ（頭骨レプリカ）やネズミ類（剥製）の標本を展示しました。

２週目は京都大学の魚研究者がつけた和名をテーマに，京都大学の魚類研究者が提唱した新和名をもつ魚を展示しました。植物の名前を由来とする和名を持つ魚として，サクラダンゴウオとトマトコンニャクウオを，それぞれヤマザクラとチェリートマトの押し葉標本と共に展示しました。ヤマザクラの標本は，牧野富太郎が採集したコレクションで，タイムリーな展示となりました。１～２週目の展示では，展示スペースの隣に，観覧者が和名から想像して魚の姿形をイラストとして描くブースを設け，名前から受けるイメージを具体化した上で，魚と哺乳類，あるいは植物の実物と比較していただきました。



図1　1週目の展示「哺乳類に由来する名前をもつ魚」



図２　２週目の展示「京都大学の魚研究者がつけた和名」



図３　サクラダンゴウオと牧野富太郎のヤマザクラ標本

３週目は，展示の目玉としてまだ和名のない魚類の新しい和名を観覧者から募り，多数のユニークな名前が寄せられました。和名の決定は論文の発表をもって行い，結果は論文発表後に博物館のウェブサイトで公表する予定です。

生物の和名は，学名と同じように，科学者が厳格なルールに基づいて決定していると一般に考えられがちですが，実際には自由で柔軟な発想に基づいてつけられた和名もあることを理解いただけたのではないかと思います。また，今回の展示では，魚類・哺乳類・植物など，分類群を越えて，できるだけ実物の標本を展示することで，当館が擁する国内でも有数な規模の生物標本コレクションの魅力をご紹介できたのではないかと思います。

（総合博物館 研究員　松沼瑞樹）

2023 年度 秋のスポット展示

しっぽの秘密～しっぽ博士のミニ展示～

会期：2023 年 11 月 1 日（水）～ 12 月 10 日（日）

学びの秋には「しっぽ」を題材としたスポット展を開催しました。我々ヒトにはない器官・しっぽ。しかし，多くの脊椎動物はさまざまな形のしっぽをとても便利に使っています。そこで今回のスポット展では，そんなしっぽの魅力を伝えるべく，多くの方になじみ深いであろう「ことわざ」と「妖怪」に着目した２部構成としました。

まず前半部分では，しっぽの登場することわざや故事成語に着目し，それら本来の意味を紹介するとともに，実際の生物学的なしっぽの形・役割から別の解釈（新しい意味）も考えてもらえる展示としました。しっぽをふる，しっぽをだす，しっぽをつかむ，しっぽをまく。しっぽの登場することわざや故事成語はなぜか，ネガティブな意味をもつものばかりです。ヒトにないものだからといって，しっぽは決してネガティブな器官でも不要な器官でもありません。しっぽを出しているからといって，化けの皮が常に剥がれているわけではありません。木の上で暮らす生き物にとっては，しっぽをふることはバランス維持に重要です。また，しっぽを枝にまきつけて体重を支える生き物もいます。敵につかまったときにしっぽを囮として逃げ延びる生き物もいます。ことわざの多くは，ヒトの伴侶動物であるイヌの行動などから名付けられたものだと思われますが，なにもイヌだけがしっぽの持ち主ではないのです。多様な角度からことわざを考えることはむしろ，しっぽの多様性を知ることにも役立つでしょう。

次に，後半部分では変形したしっぽをもつ生き物に着目し，いなさそうでいる（実在），いそうでいない（非実在）、そんな多尾化動物を取り上げました。

多尾化動物の代表格として九尾狐が挙げられますが，



図１　しっぽの秘密展全景



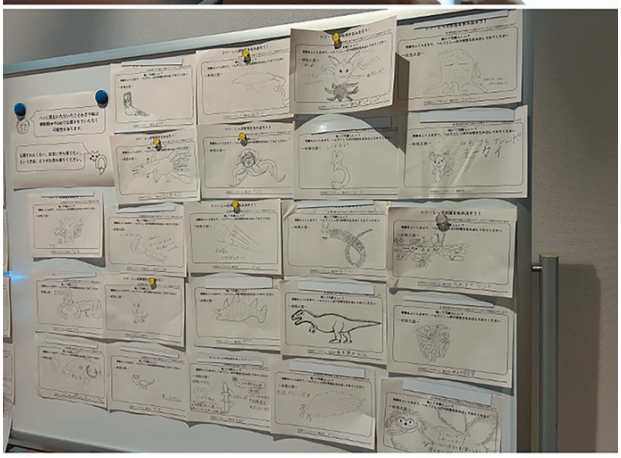


図２　新たなしっぽことわざ・妖怪がたくさん生まれました！

残念ながら九尾狐は実在しません。トカゲの仲間ではときに，一見しっぽがふたまたとなっている二叉尾状態のものがいます。しかしこれは，尾の再生にともなって偶然に形成されたもので，再生尾には硬骨が入っていません。しっぽの中に存在する脊椎ごと二又になる生き物というのはほとんど存在しないのですが，ほぼ唯一の例外がキンギョです。ひらひらとした二又の尾鰭をもつ種類では，椎骨ごと二又となっています。

たった一つのしっぽという対象であっても，見方を変えるだけで新しいことが見えてきます。来館者の方々による新たなことわざ・妖怪考案コーナーには日々新たな楽しいアイデアが増えていきました。本展示は原稿寄稿時点ではまだ始まったばかりですが，会期中に一体どのような楽しいアイデアが考案されるのかわくわくしながら展示担当者も日々新しい気づきをいただいています。

（白眉センター［総合博物館］　特定助教　東島沙弥佳）

レクチャーシリーズの開催

開催日：2023 年 7 月 8 日（土）および 9 月 9 日（土）

総合博物館のレクチャーシリーズは，コロナ禍での中断を経て，本年度再始動した。本年度の企画として，京都大学学術出版会の新・動物記シリーズの著者にレクチャーをお願いした。再始動後の初回となる 5 月 13 日（本誌前号 p.8）に引き続き，7 月 8 日には齋藤美保先生（京都大学）にキリンの仔育てについて，9 月 9 日には竹内剛先生（大阪公立大学）にチョウの他者認識についてご講演いただいた。いずれの回も会場は満員となり，多数の方が，理知と情熱にあふれたフィールド研究者の世界に魅了された様子であった。

（総合博物館 准教授　佐々木智彦）



満員の会場

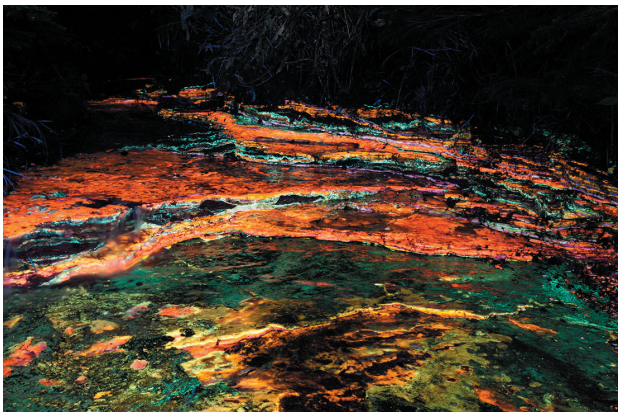


レクチャーの様子

北海道石の常設展示への出陳

2023 年 1 月に国際鉱物学連合の新鉱物・命名・分類委員会により「北海道石」が新鉱物として承認された。北海道石は北海道河東郡鹿追町や上川郡愛別町に産するオパール中から発見された。化学組成が C22H12 で表される多環芳香族炭化水素である 1, 12- ベンゾペリレンの結晶であり，非常に珍しい有機鉱物の一つである。有機物の鉱物というと違和感があるかもしれないが，「一定な化学組成で無機的に形成された結晶構造を持つ物質」であれば「鉱物」であり，天然の氷なども鉱物である（一方，オパールは結晶構造を持たないものがいるため，準鉱物とされることもある）。ちなみに都道府県名がついた石としては「大阪石」や「滋賀石」が存在するが，「京都石」はまだ存在しておらず，今後の命名が期待される。

今回，北海道石の研究グループの一人であり，当館の研究協力者でもある石橋隆研究員（大阪大学総合学術博物館 招聘研究員）より北海道石の標本を寄贈いただいた。北海道石の産地は元々国立公園やジオパークの周辺にあり，2023 年 9 月 26 日に「然別火山群のオパール産地」として町の天然記念物にも指定されたため，採取が厳しく制限されている貴重な標本である。当館ではそのような貴重な標本の一部を 9 月末より常設展示することとした。北海道石は紫外線を当てると，母相のオパールや共存する有機鉱物であるカルパチア石とともに強く蛍光し，鮮やかな蛍光色を呈する。そのため，常設展示では紫外線を照射できるブース（南館 1 階 自然史展示室 「地球をつくる鉱物」）にて，他の蛍光鉱物とともに展示している。北海道石を蛍光観察できる状態で常設展示している博物館は未だほとんどないため，興味があるけどまだ見たことのない方，この記事で興味を持った方は，ぜひ当館にて実物をご覧いただければと思います。



紫外線による産地での蛍光の様子（提供：石橋隆）

（総合博物館 助教　竹之内惇志）

日本建築学会大会（近畿）作品展

会期：2023 年 9 月 13 日（水）～ 15 日（金）

9 月中旬に京都大学で開催された 2023 年度日本建築学会大会（近畿）に合わせて，建築作品展が当館の南館 2 階企画展示室にて開催されました。作品展では日本建築学会賞をはじめ，日本建築学会設計競技全国入選作品や，優秀卒業論文・修士論文賞，全国大学・高専卒業設計作品など，計 7 部門で各賞を受賞した作品や事業が展示されました。実際に展示されたものとしては，論文そのものや設計図面，技術や教育貢献事業の解説パネルなどで，作品数は合計すると 200 点を超えていました。展示品はすべて平面的かつ数が非常に多かったため，展示面積と動線の確保が一つの課題でしたが，移動壁を一切使わずに展示室全体を利用することで広い展示面積と安全な動線を両立してもらいました。論文や図面は手にとって閲覧することができるようにすべて長机に平置きで並べ，パネルは展示室の壁沿いに掲示する形での展示となりました。作品数の多さはライティングの難しさにも繋がり，見やすい展示をするためには非常に多くのスポットライトを必要としました。そのため，消費電力を考慮しながら最大限にスポットライトを利用し，効率的なライティングで展示を行いました。



開館前の展示室の様子

展示期間中は学会参加証を提示することで入館を無料とし，作品展だけでなく当館の常設展示も観覧できるように手配しました。その結果，展示期間の 3 日間で合計 1,937 名もの方に来館していただき，当館の魅力の再発信にも繋がったと考えています。期間中は学会の学生アルバイトが当館スタッフと協力して受付・看視を行っていたため，非常に多くの来館者にも対応することができ，大きな問題が起きることなく無事に展示を終えることができました。準備・運営に協力してくださったすべての方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

（総合博物館 助教　竹之内惇志）

農学研究科コムギジーンバンク事業（NBRP・コムギ）紹介展示

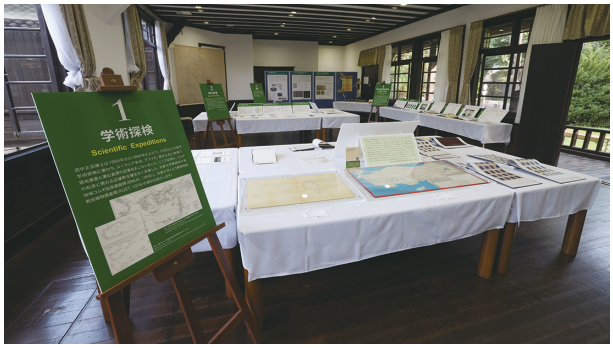
学術探検と遺伝資源

会期：2023 年 10 月 12 日（木）～ 14 日（土）

農学部創立 100 周年を記念して，展覧会「学術探検と遺伝資源――田中正武アーカイブズと NBRP・コムギリソース」が吉田キャンパス北部構内の旧演習林事務室ラウンジで開催されました。3 日間の短い会期にもかかわらず，シンポジウム「コムギ研究の新展開」（10 月 13 日）の参加者や新聞記事（『京都新聞』10 月 11 日朝刊）を目にした農学部 OBOG ら約 150 名がご来場くださいました。

本展は，田中正武博士が参加した学術探検の記録（田中正武アーカイブズ）と現地での採集物を分類・系統化した遺伝資源（ナショナルバイオリソースプロジェクト・コムギリソース）とを紹介する展示で，総合博物館は，京都大学研究資源アーカイブが整備した田中正武アーカイブズの資料リストとデジタル化資料（一部）を提供し，展示実行委員会にも協力しました。

会場の都合で出陳物の多くは複製資料となりましたが，手元で資料を閲覧できたことによって，観覧者は博物館での展示とは異なる満足感を得たようです。小さな展示でありながら，アーカイブズの展示は現物展示という思い込みを払拭して，資料の見せ方を再考する契機となりました。田中正武アーカイブズは「田中正武研究資料，1929–1997」として 2024 年度にオンラインで公開予定です。



展示風景。第 4 章では研究資源アーカイブについて紹介した
撮影：岩倉正司（情報環境機構）

（総合博物館 特定助教　齋藤歩）

博物館実習（館園実務）の実施

開催日：2023 年 9 月 4 日（月）～ 8 日（金）

毎年開講される全学共通科目である「博物館実習（館園実務）」が 9 月初頭に 5 日間の日程で開講された。この授業は学芸員資格を取得する上で必要な単位であり，受講者は実習を受ける博物館や相当施設を自身で選択することができる。今年度の当館の実習には，学内から 26 名，学外から 5 名の学生が参加した。当館では 5 日間の実習を 5 人の教員がリレー方式で担当しており，博物館における様々な活動を学生に経験してもらっている。実習の内容としては，実際に当館所蔵の標本を用いた標本管理や収蔵庫整理，データベース管理といった博物館内部の活動から，当館の展示を生かした企画立案や広報・情報発信，社会教育活動など博物館の外へ向けた活動まで，博物館の業務を断片的ながら広く体験できる。コロナ禍で全日程オンラインになっていた影響で，今年は昨年度に引き続き対面での実習 4 日間とオンラインでの実習 1 日の計 5 日間の開講となった。来年度以降は，全日程対面に移行していくことを現在検討中である。本紙面では私が担当したオンラインでの社会教育活動の実習について報告する。

当館の代表的な社会教育活動として「子ども博物館（子ども博）」が挙げられ，本実習では例年子ども博に関わる業務を体験してもらっている。対面実施の際は自身で各々子ども博の企画を立案し，夏季休暇中に実際に参加してもらう方法をとっていたが，オンラインになってからはグループに分かれ，意見を出し合い一つの企画を立案するという実習となっている。バックグラウンドの異なる学生たちで一つの企画を立案するのは難しい面もあるが，それぞれの強みを組み合わせて全く新しい企画を立案するグループもあり，学生の意欲の高さが覗えた。企画の内容は多様であっても，子ども相手に社会教育活動を行う際の注意すべき点・配慮すべき点は共通しており，「無理に教え込もうとしない」「子どもからの発言を促す」といった考えを皆で共有することができた。さらに，各班のテーマで子どもの発言を引き出すにはどのような工夫をすればよいか等，具体的な方策までをグループで議論することで，子ども相手の社会教育活動の姿を深く考える良い機会となったと考えている。

来年度以降も当館では博物館実習（館園実務）が開講される予定となっている。学芸員資格取得を目指している学内外の学生さんはぜひ当館での実習を検討してみてください。

（総合博物館 助教　竹之内惇志）

大地は語る 2023 地球の脈動 宇宙の躍動

開催日：2023 年 11 月 19 日（日）

「大地は語る 2023 地球の脈動 宇宙の躍動」が，関西文化の日に合わせ，11 月 19 日に開催されました。「大地は語る」展は，地質学鉱物学教室（理学研究科地球惑星科学専攻）の大学院生が中心となって開催するイベントです。本年度は 4 年ぶりに大学院生と教員による講演会も含めて開催することができました。

地質学鉱物学教室の各研究室がブースを出展し，各研究室の所有する隕石や古生物などのさまざまな標本だけでなく，普段博物館の収蔵庫に収蔵されており，簡単に見ることのできない鉱物標本や岩石標本なども展示することができました。さらに，岩石薄片の顕微鏡観察，VR 露頭観察，摩擦実験といった体験型のブースも用意しました。講演会は，宇宙塵について，地層から見る津波，岩石の模様という 3 つのテーマで行われました。

当日は前年度を上回るおよそ 250 名の方にご来場いただきました。多くの方々に地球，ひいては宇宙を相手にする学問の面白さを存分にお伝え出来たのではないかと思います。我々大学院生も，小学生以下からご年配の方まで幅広い世代の方々と楽しんで交流することができ，普段研究していることを一般の方々にお伝えするという非常に貴重な経験をさせていただきました。



会場の様子

開催にあたりお世話になった方々，そして当日ご参加いただいた方々に心より感謝申し上げます。

（理学研究科 修士課程　中野美玖）

こども科学博 2023 のワークショップ

会期：2023 年 8 月 4 日（金）～ 6 日（日）

2023 年 8 月 4 ～ 6 日に「京都市勧業館みやこめっせ」で開かれた「こども科学博：生命のキセキ」でワークショップをおこないました。このイベントは，多くの子供達に五感を使った体験とコミュニケーションで楽しく科学にふれて , 科学の楽しさを知ってもらおうということで稲森財団が開催しているものです。新型コロナ感染症が蔓延する前に第 1 回が開催され，ようやく第 2 回が開催されました。ものすごく大きな会場に様々なコーナーが設置され，何百人という親子が来場して楽しそうなイベントでした。

私は博物館の学生達に手伝ってもらって，「京都 キヅキ “ ワークショップ ”」というコーナーを担当しました。30 人弱の子供達に実物の脊椎動物化石に触れてもらい，何の動物かあててもらうというワークショップを行いました。ワニ・カメ・ゾウ・サイ・ウシなどのよく知られた動物の化石を用意して，テーブルごとに子供達で話し合ってどんな動物か考えてもらいました。3 日間で 6 回



ワークショップの様子

のワークショップを行ったのですが，骨や歯の破片化石では難しくて何の動物か全然わからなかった回があるかと思うと，一発で当ててしまう子供がいたりして予想がつきませんでした。今後は，総合博物館でもこういったワークショップを開いてみたいと思います。

（総合博物館 教授　高井正成）

大丸京都店への出張子ども博物館

会期：2023 年 8 月 9 日（水）～ 14 日（月）

近年大丸京都店では，子育て世代の顧客獲得とともに子どもへの様々な体験機会の提供として「だいまるきょうとっこがくえん」というプロジェクトを進めている。このプロジェクトでは毎週末に京都に関連する文化や芸術，職業体験などができる非常に多様な授業を開講しており , 人気を博している。当館でも 20 年以上前から「子ども博物館」に力を注いでおり，両者は地元の子どもたちへ教育機会の提供という共通の目的を持っているため，何か協力できる機会はないかと考えていた。そんな中，夏休みの拡大企画として「だいまるきょうとっこがくえん　がくえんさい」を実施するとのことで，協力の打診を頂いた。そこで，子ども博物館を出張して開催するという形で協力することとなった。

イベントへは普段から子ども博物館に参加している学生スタッフ 3 名が参加し，それぞれが各々の企画を実施した。普段の活動では一人ひとりの子どもと対話を重視して企画を行っているが，今回のイベントでは人の出入りが多く時間も限られていたため，手を動かしてモノを作って学ぶという点に重点を置いた。期間中は合計 100 名を超える方に参加していただき，中には当館の



ワークショップの様子

存在を知らなかったという方にまで子ども博物館の活動を届けることができ，館外へ足を伸ばすことの重要性を体感した。反対に，普段の子ども博物館のリピーターの方が大丸京都店にまで足を運んでくださり，大学博物館と百貨店という普段接点のない両者が協力することでとても良い相乗効果があったと考えている。

本企画の一部は，「総合博物館 子どもふれあい博物館プロジェクト助成」の支援を受けて実施されました。この場を借りてご報告及びお礼申し上げます。

（総合博物館 助教　竹之内惇志）

京都大学総合博物館ー国立台湾大学博物館

動物学博物館シンポジウム・ワークショップ

2023 年 7 月 26 日（水）～ 28 日（金）

京都大学総合博物館と国立台湾大学博物館が共同で開催した「動物学博物館シンポジウム・ワークショップ（Kyoto University Museum - National Taiwan University Museum of Zoology 2023 joint symposium & on-site workshop）」が，台北市の国立台湾大学で行われました。このプログラムでは，2012 年以降，京都大学と台湾大学が共同研究のために行ってきた学際的な交流プログラムの一環として，とくに動物学分野での持続的な交流の発展が目標とされました。京都大学からは，4 名が現地で，3 名がオンラインで参加し，台湾大学からは学生を含む 20 名以上が参加しました。

初日から 2 日目の午前中には，陸生哺乳類・無脊椎動物，海産魚と多岐にわたる分類群の研究者による，博物館での動物標本コレクションを活用した研究や，展示・教育普及活動に関する取り組みについての発表が行われました。2 日目の午後からは，魚類と無脊椎動物のグループに分かれてワークショップが行われました。松沼は Wei-Jen Chen 教授の研究室で，台湾大学の若手研究者・学生と海産魚類の分子系統地理・分類学に関するワークショップに参加し，研究紹介と意見交換を行いました。その後，学内の魚類標本館で Chen 教授が収集した深海魚類の標本調査を行い，今後の共同研究について議論を交わしました。短い期間でしたが，新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより途絶えていた交流が再開され，具体的で強固な協力関係を発展させることができたことを喜ばしく感じます。



セミナーでの魚類標本の調査

（総合博物館 研究員　松沼瑞樹）

国立台湾大学で開催された「動物学博物館シンポジウム・ワークショップ」に参加しました。前半は大学博物館における動物学コレクションの教育研究への活用を焦点に，両大学から 17 名が研究紹介を行いました。異なる文化やバックグラウンドをもつ研究者の意見に触れることができ，考えを深める貴重な機会になったと思います。

後半はワークショップとして，現地の研究者や学生と交流する場が設けられました。寄生虫の分類を専門とされている Y.-T. Lai 博士とは，私が研究しているヒル類について議論を深められた上，博士のコレクションを観察させていただくことができました。また，発生生物学的な観点から環形動物の進化を研究されている D.-H. Kuo 博士は，私が興味を持っていた，ヒル類を用いたゲノム編集の一連の操作を実演してくださいました。あっという間の滞在ではありましたが，共同研究についての建設的な話し合いもでき，大変意義深い時間を過ごすことができました。



シンポジウム参加者の集合写真



シンポジウムでの発表

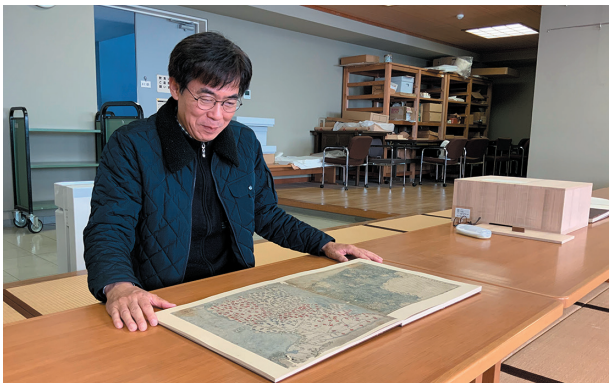
（理学研究科 研究員　神林千晶）

招へい研究員（客員教授）　朴秀哲　PARK　Sucheol

招へい期間：2023 年 8 月 1 日（火）～ 2024 年 1 月 31 日（水）



総合博物館の文化史展示室にて



「広輿考」の中の朝鮮地図



「広輿考」表紙の裏

2023 年 8 月 1 日から京都の暑い夏とともに，6 ヶ月間の京都大学総合博物館での研究が始まった。当初 2020 年に渡日が決まっていたものの，新型コロナウイルスという全く予期せぬ事情で，ようやく実現した 3 年遅れの渡日であった。振り返ってみると，2000 年に京都大学の文学部で博士号を取得し帰国してから，ほぼ 20 余年を経て再び京都に戻って来たことになる。待ちに待った京都での生活であり，若かった時の留学時代を思い出しながら，楽しみつつ研究を進めた。

2000 年に取得した京都大学博士論文のタイトルは「織豊政権の寺社支配」で，以後も主に織豊政権と宗教の関係に関心を持って研究を進めてきた。京都大学総合博物館から招へい研究員として許可を受けた研究テーマも「織田信長は「革命児」か，それとも「異端児」か」であった。一方，最近では中近世移行期の日本国家・社会の特質にも興味を持ち，日本社会が韓・中と違って「学文（学問）」を基盤とする科挙制を導入しなかった理由や状況の解明を進めた。特に織田信長を中心に，家業中心の中世日本で，先天的な血統の「負」の問題を克服するため，より後天的で個人の才能ともいえる「器量（器用）」（これを表す「高名（功名）」）を希求した背景やその実態を研究した（朴秀哲「韓国からみた日本中世史―「伝統」と「革新」の観点から」（黄霄龍／堀川康史 編『海外の日本中世史研究―「日本史」・自国史・外国史の交差』勉誠出版，2023 年 10 月参照）。

京都大学総合博物館では，岩﨑奈緒子教授のご案内で「広輿考（勧修寺家本）」という東アジア 3 国に関する地図や朝鮮王朝の戸籍などの資料を見せていただいた。特に「広輿考」は，中国汪縫預作で，万暦 22 年（1594）完成，万暦 23 年（1595）刊行のものであること，本来 2 冊本だが，万暦 39 年（1611）刊の京都大学の所蔵本は 3 冊であるとのご教示をいただいた。元中国の地図が朝鮮に流れ，朝鮮人が再び編集した朝鮮の地図がまたも日本に渡って行く，実に韓中日 3 国間の交流を示す，とても興味深い地図であった。韓国では朝鮮後期（江戸時代）に比べて朝鮮前期（室町時代）頃の地図は非常に少ない方で，韓国の研究者たちの注目に値する非常に貴重な資料だといえる。ソウル大学には「朝鮮王朝実録」など朝鮮時代の王室関係の資料をたくさん受け継いだ奎章閣（奎章閣韓国学研究院）という研究所がある。資料保管や活用という側面から京都大学総合博物館との交流が望まれ，今後，両機関の間に共同研究を含めた更なる関わりが進むことを願っている。

（総合博物館 招へい研究員（客員教授）　朴秀哲）

子ども博物館だより〈3〉

地層をどう魅せるか

堆積学研究室の先輩から誘われ，2022 年の秋から子ども博物館に参加している。自身の研究に関連付けた展示として，地層の剥ぎ取り標本や平行葉理を示す砂岩，また液状化現象の実験装置やタービダイトの実験装置を利用している。

展示にあたり，所持していた剥ぎ取り標本や砂岩に加えて，地層の形成過程をイメージしてもらうための実験をすることに思い至った。そこで，動きが分かりやすい液状化現象の実験装置を利用することにした。この実験装置は，水で満たしたペットボトルに 3 種類の大きさのプラスチックビーズを入れたものである。ボトルを振るとビーズの大きさの違いによって層状に堆積し，地層のような縞模様を呈する。その後，ボトルを叩くと液状化が起こり，下部のビーズの層に含まれる水が上部に移動するのに伴って，着色されたビーズが上に噴き出る仕組みである。この実験ボトルは特に未就学児の子どもが好んでくれることが多い。

一方の剥ぎ取り標本や砂岩については，予想に反して子どもから大人まで人気がある。個人的には嬉しいことだが，それはさておき，これらの資料に関して特定の質問をされることが非常に多い。「(地層を)どのように取ってきたのか？」という質問である。京大博物館等でも剥ぎ取り標本を目にする機会はあるが，採取方法があまり分からないというケースが多いらしい。自分の用意した剥ぎ取り標本は，手に取って観察できるサイズであることや，剥ぎ取りに使ったカウンタークロス（税込 108 円）が貼り付いているため，採取方法を感覚的に理解しやすいのかもしれない。



展示物の様子

多少のチープさを感じる実験装置や地層標本を通じて，少しでも地層や地学を身近に感じてもらうため，今後も展示をアップデートしていくつもりである。

（理学研究科 博士後期課程　長門 巧）

中世写本を読むこと

文学研究は，作品そのものを読むことが基本になります。場合によっては出版されたものだけでなく，草稿（manuscript）などを自ら「解読」する必要もあります。印刷以前の時代を対象とする場合，通常は写本（manuscript）を翻刻したものを利用するため，写本を意識する機会も多くなります。そんなわけでフランスの中世文学を専攻する私は，少なからぬ時間を写本を眺めながら過ごしてきました。

子ども博物館に話を移します。人文社会系の研究を子ども向けに紹介するためには，時代背景や地理など，あるいは外国語の知識が前提として求められがちなため，工夫しなければいけません。現物資料を見せることも難しいですが，立体的な形を持つものに魅力は劣るものの，画像を示すことはできます。そこで，子ども博物館では，「古い文字の話－ヨーロッパ編」というタイトルで，中世写本に書かれた文字を実際に読んでみよう，という話をしています。具体的には，まず写本の文字について簡単に説明した後に，単語レベルでの抜粋コピーのカードを見せます。単語はいずれも現代英語と同じスペリングのもので，活字に直したものも示してそれと一致するものはどれか，という形で考えてもらいます。このようにして，パズル感覚で文字の形を見てもらうことで，興味を持って聞いてもらえているようです。意外なことに，大人と正答率はほとんど変わらず，重要なポイントを突く発言が子どもの口から出ることも珍しくありません。会話の流れによっては，研究の話もすることもあります。どの程度学びとして残るかは定かではありませんが，学校のカリキュラムには含まれない内容であり，彼らの世界を広げることができていれば本望です。

私の専門分野による制約から，ラテン文字で書かれているものに話の内容は限られてしまっています。しかし，研究においてもオリエントにも関心が向ける必要が出てきたので，それに合わせて子ども博物館でも，ギリシア文字など，ラテン文字圏外の文字にも範囲を広げていきたいと考えています。

（文学研究科 博士後期課程　宮下拓也）

総合博物館コレクション研究〈19〉

博物館にひそむしっぽ〈自然史標本編〉

しっぽとはなにか

先が細くなっていて，にょろにょろとした長いもの。日本語ではおよそこういった形状のものを広くしっぽと呼びます。しかし，生き物の研究となると，ふんわりとした感覚で名前をつけたり呼んだりしてはいけません。しっぽも例外ではなく，脊椎動物においては以下のような条件を満たしているものだけをしっぽと呼びます。

しっぽの条件としてまず大事なことは，その位置と形です。総排泄孔あるいは肛門よりも後ろ側にあり，さらに体の外に出っ張っている必要があります。裏を返せば，どんなににょろにょろしていても，それが腕や顔から生えていればしっぽとは呼びませんし，我々ヒトのように尾骨はあっても体外に突出していなければ，しっぽがあるとは言えません。

また，しっぽの中身，すなわちどういったものがしっぽを構成しているのかも大切な条件です。構造的に脊椎動物のしっぽは，体幹とよばれる胴体部分の延長です。そのため，内部には椎骨や筋肉，そこに付随する神経血管系が存在しています。筋骨格を備えているので，しっぽを動かすことができるわけです。

さて，そのしっぽですが，動物たちは実に多様な形のものをさまざまな用途に用いています。ですから，しっぽを見ると我々は生物の適応と系統とを知ることができます。それでは，この京都大学総合博物館で見ることのできるさまざまなしっぽをご紹介したいと思います。



図１　バランスをとるための長い尾



図２　ビントロングの把握尾

木の上で役立つしっぽ

木の上で暮らす生き物の行動を思い出してみてください。彼らは不安定そうな枝の上を跳んだり跳ねたり，木から木へと飛び移ったりします。そんなときに役に立つのが長いしっぽです。たとえば樹上性の霊長類では，細い枝の上などを歩く際に，しっぽを左右にふってバランスをとることが知られています（図 1）。このしっぽの持ち主は，クロミミマーモセット（*Callithrix penicillata*）です。南米に生息する小型の霊長類で，樹上環境を敏捷に動き回ります。霊長類以外でも，たとえばリス類などでは跳躍時にしっぽをふって勢いを得ることが知られています。

木の上で暮らす生き物のしっぽ，というとサルのしっぽを思い浮かべる方もいるかもしれません。そして，しっぽでぶら下がる姿をイメージされることでしょう。実際に，木の上で暮らす一部の生き物は，巻きつけることのできるしっぽを持っています（図 2）。ですが，そういった器用なしっぽをもつ生き物は決して多くはありません。こちらのしっぽの持ち主は，ビントロング（*Arctictis binturong*）というジャコウネコの仲間です。木の上で暮らし，主に果実を食べる彼らは，しっぽの先端を枝などに巻きつけることができます。このような巻きつけられるしっぽのことを，把握尾（prehensile tail）といいます。脊椎動物において把握尾をもつのとしては，ビントロングをはじめとする一部の食肉類およびクモザルやホエザル，オマキザルなど中南米に生息する一部の霊長類がよく知られています。これ以外にも，中南米に生息するヤマアラシの一種や有袋類の一部にも把握尾をもつものがいます。

逃げるのに役立つしっぽ

しっぽは，捕食者と遭遇してしまった際にも役立ちます。私はつい先日，総合博物館の入り口付近でニホントカゲの幼体を見かけました。私はつかまえ損ねてしまいましたが，もしトリなどの捕食者が彼らのしっぽを掴んだなら，しっぽはプツリと切れることでしょう。そしてしばらくの間，激しく暴れまわります。しっぽは囮となり，持ち主は一難を脱することができる訳です。トカゲ類のしっぽは切れる場所が決まっており，その箇所を自切面といいます。その断面を電子顕微鏡で観察するとプラグとソケットのような構造になっているという論文が近年発表されました。そのため，まっすぐ引っ張る力には強く，横から力が加わると簡単に折れるようになっているようです。このように，しっぽは対捕食者対策としても重要な器官であるといえます。

しっぽをおとりとして逃げるという使い道はトカゲ類の他に，リス類でもみられます。ただし，トカゲ類のしっぽは一見元通りに再生できるのに対し，リス類のしっぽは再生しません。また，トカゲのしっぽも完全に元通りになるわけではなく，本来しっぽ内部に存在していたはずの硬骨は再生されません。さらに，しっぽが完全に切れ落ちることなく傷ついた場合などには，その傷口から二次的にしっぽが再生され，二叉尾のトカゲと化してしまうこともあります（図 3）。

しっぽのようでしっぽでないもの

総合博物館には，多様な種類の鳥類剥製標本も収蔵されています。状態のよいものも多く，その代表が，「しっぽの秘密展」にも出演したヤマドリの剥製標本です（図 4）。ヤマドリは古くから長い「尾」があるとして知られてきたトリです。日本最古の歌集である万葉集にも下記のような和歌が収録されています。

あしひきの　山鳥の尾のしだり尾の　長々し夜をひとりかも寝む

長く垂れたヤマドリの「尾」に，恋しい人に会えず独りで過ごす秋の夜長を重ねています。さらに当時，ヤマドリのつがいは日中共に過ごすものの，夜になると別々に過ごすと信じられていました。そのため，この和歌に含まれるヤマドリには，秋の夜長，それをさらに長く感じさせる独りの寂しさが重ねられています。なんとロマンチックなことでしょう。しかし大変興醒めではありますが，ヤマドリのしっぽは実際のところ短いのです。長く見えているのは，尾羽であってしっぽではありません。

現生鳥類はすべて短尾です。トリの祖先と考えられる化石種は 20 個以上の尾椎を含む立派なしっぽをもっていました。しかし飛翔へと適応した結果，尾椎の数は減少し，しっぽ先端の尾椎は癒合して尾端骨という構造になりました。この尾端骨に尾羽が付着しています。ですから，先ほどのヤマドリやオナガドリのように，一見どれほど長尾に見えようとも，そのトリのしっぽの長さはローストチキンのおしりにある出っ張りとさほど変わらないのです。ちなみにこのトリのしっぽは，焼き鳥屋さんではぼんじりと呼ばれています。生物学的に我々ヒトは失ってしまったしっぽですが，博物館はもちろんのこと，我々の日々の生活の中にも，意外と身近なところにひそんでいるのです。

（白眉センター［総合博物館］特定助教　東島沙弥佳）



図 3　二叉尾のトカゲ

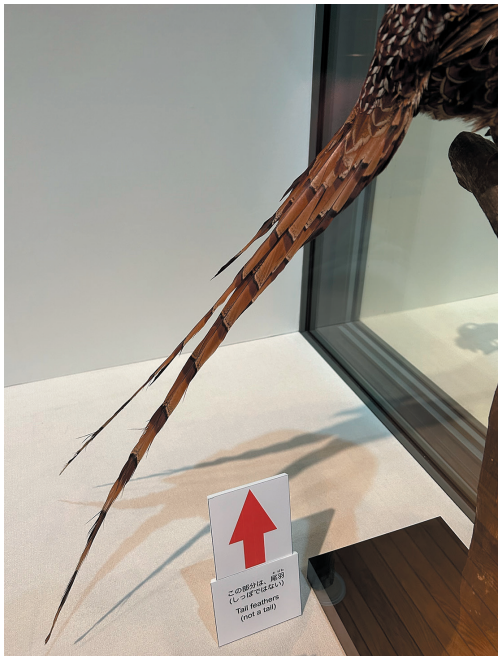


図 4　ヤマドリのしだり尾

研究資源アーカイブ通信〈28〉

オンライン展示「展示コンテンツ」の開始から終了まで

京都大学研究資源アーカイブ（KURRA）提供の研究資源の一つに標記「展示コンテンツ」がありました。2011年3月の京都大学デジタルアーカイブシステム（パブリックモード）一般公開とともに始まり，2023年3月末に終了しました。この小文で経緯を記しておきます。

＊

現在KURRAの公開情報サービスとしては京都大学デジタルアーカイブシステムPeekが中心にあるものの，アーカイブ資料を対象とするオンライン情報サービスの他例に同じく，いまだに閲覧・検索の利用に際し〈わかりづらい〉との謗りを免れません。京都大学デジタルアーカイブシステムは，その運用が始まった2009年当時，アーカイブ資料じたいを理解してもらいづらかった状況にあって，いっそう〈わかりづらい〉存在でした。当時「デジタルアーカイブ」に期待されていた内容は，およそ「オンライン展示」で，京都大学デジタルアーカイブシステムの持つ基本機能であるアーカイブ資料の資料群（コレクション）単位の検索手段とそれをもとにしたデジタル化した（デジタルの）資料内容の一式を提供する「デジタルコレクション」とでは，だいぶかけ離れていたのです。

そのため京都大学デジタルアーカイブシステムには一般向けにパブリックモードを用意し，それでもなお不親切な情報提供を補うべくオンライン展示である「展示コンテンツ」も同時に用意することとなりました。ただし2011年公開のデジタルコレクションすべてに対応する展示コンテンツを用意するわけではなく，特徴あるアーカイブ資料を対象とした4件だけ制作しました（表1）。KURRAで取り扱うアーカイブ資料の活用例・模範例という位置づけは，映像ステーションで公開される研究資源「映像コンテンツ」と同じです。ゆくゆくは，京都大学デジタルアーカイブシステムにある他の資料ないしコレクションを用い，KURRA関係者に限らず京都大学デジタルアーカイブシステム利用者の手で活用例が増えていくことを期待していました。

しかし，その期待どおりに展示コンテンツは増えていきませんでした。オンライン展示の制作は，たんに京都大学デジタルアーカイブシステムにあるデジタルの画像・映像を抜き出してコレクションやその出所の教育研究活動の逸話に配置すればよいわけではなく，その時どきに適切で効果的な表現にも気を配らなければならず，〈実際の展示〉と同じ負担があります。当時のKURRA関係者が，新規の研究資源化に対応し公開デジタルコレクションを増やそうとする片手間で取り組むには手に余る内容でした。

京都大学デジタルアーカイブシステムは，2011年当時，たとえば画像を低い解像度にする，といった制限をかけています。まだ現在のような拡大縮小自在なビューアがなく，画像は表示ページへ埋め込むだけでした。高解像度画像を公開したら無断使用だけでなく切り取り・改変等が加えられ公開意図から外れた無制限な流通となる不安があったのです。これを補って展示コンテンツでは，表現の工夫やブラウザプラグイン（Adobe Flash Player）使用により，比較的高解像度の画像を提供しました。映像については，京都大学デジタルアーカイブシステムでも展示コンテンツでも，ストリーミング配信を採用し，画像の場合のような不安はありませんでした。

4件の展示コンテンツは，例示の位置づけから〈常設展示〉のように維持されていきます。そして，その維持は，年数を経るにしたがって，技術と情報セキュリティの困難が大きくなっていきます。

表1 「展示コンテンツ」と対応するアーカイブ資料

（イ）石舞台古墳 発掘の記録

→ 京都帝国大学文学部考古学教室ガラス乾板写真：石舞台古墳発掘, 1933–1935. †

京都帝国大学文学部考古学教室 16mm フィルム：石舞台古墳発掘, 1933–1935. † ‡

† 映像ステーション限定公開

‡ ダイジェスト版映像内包

（ロ）動きつづける大陸：藤田和夫のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊資料

→ 京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊地質班関係資料, 1955–1956.

* 映像コンテンツ「動きつづける大陸」内包

（ハ）近衛ロンド

→ 「近衛ロンド」録音テープ資料, ca. 1973–1977. †

† 録音は映像ステーション限定公開

（ニ）1956-1976 宮本正太郎の火星スケッチ

→ 宮本正太郎資料：火星スケッチ, 1955–1976.

* 映像コンテンツ「変動する宇宙の姿：京都大学の宇宙世界」内包

展示コンテンツは,(イ)〜(ニ)それぞれの区画を作り,いずれも同じサーバに置いていました（末尾「かつての展示コンテンツ URL」参照)。KURRA のウェブサイトとも京都大学デジタルアーカイブシステムとも同居していません。（イ）〜（ニ）が同じソフトウェア・CMS 等を使うわけではなく，4 つの情報システムを管理しなければならないのと同じ状況でした。

公開後の変化の概略（表 2）は，ほとんど技術や情報セキュリティの共通の課題：(a) 内包映像にかかる映像配信方式，(b) Adobe Flash Player を要する表現・表示機能，(c) サーバ環境，これらへの対応です。情報システムの一般的更新サイクルからは 2016 年〜 2017 年の変化は妥当そうに見えますが，実は採用していたソフトウェアの終了に因ります。とくに(b)の Adobe Flash は，当時ウェブサイトにおけるリッチコンテンツの実現に多く採用されていた一方，その普及ゆえに多くの脆弱性も明らかになっていきました。そのため代替技術を調査しつつ可能な更新を進めたのです。

(a)(b) は，サービスやサポートの終了期限までに代替化を終えることができました。2018 年の https 化もサーバ証明書有効期間短縮の流れの中でも維持に対応できていました。2020 年に迫られた (c) の変更は，かなりの困難に直面します。サーバ OS の種類が変わり，使用していたスクリプト言語 PHP のバージョンが上って，これまで実行できていた処理が動かなかったのです。古いバージョンを使えば動くものの情報セキュリティ的に選択できず，その処理を捨てるとオンライン展示としての存在意義を失います。種々の変化・状況から制作当時の業者を頼れず，別業者へ依頼してともに調査を進め，半年をかけて解決までたどりつきました。この過程を OS やスクリプト言語等のバージョンアップの度に繰り返すのは非現実的とかんがえるほかありませんでした。

＊

展示コンテンツの公開を映像ステーションのような閉じた範囲に限っていれば，当初のまま維持できたかもしれません。オンライン一般公開の条件では，どうしても情報システムの安全確保が必要で，常設展示的維持には公開基盤の条件に合った〈作り直し〉が不可欠です。そうでなければ常設性を諦め有期限としたほうがよい。

いま展示コンテンツにかわって，国立国会図書館の運用するジャパンサーチを利用したアーカイブ資料情報の提供が進められています。安定したプラットフォームで〈作り直し〉の負担が軽減されると期待しています。

（総合博物館 講師　五島敏芳）

表 2　「展示コンテンツ」略年表

2011 年 3 月 15 日 （イ）〜（ハ）公開

2013 年 4 月 （ニ）公開

2014 年 10 月　Helix Server* 開発・ライセンス終了

2016 年 10 月　内包映像配信方式変更（Helix Server* → Kaltura**）

* 情報環境機構「ホームページサービス」オプション「ストリーミングサービス」，2016 年 11 月末提供終了

** 情報環境機構映像収録管理配信サービス（外部サービス）試用（当時）

2017 年 2 月 （ハ）の Adobe Flash Player 使用部分（タグクラウド表現）を HTML5 化

2017 年 7 月　Adobe Flash Player サポート終了発表

2018 年 1 月　常時 SSL 接続（https 化）開始

…サーバ証明書発行申請の定期化

2020 年 8 月 （ロ）の Adobe Flash Player 使用 Web パンフレット形式であった「写真資料集」「ものがたり冊子」電子版とルートマップ電子版を，それぞれ EPUB 形式と DZI 形式へ変換，EPUB リーダ・DZI ビューア組み込み

2020 年 9 月 （イ）〜（ニ）サーバ環境移行 * 開始 **

* 情報環境機構「WEB ホスティングサービス」タイプ K（学内サーバ）からタイプ S（学外サービス）へ移行

** サーバ変更（PHP・CMS 等バージョン上昇）による移行先環境での不具合（とくに（ハ）（ニ）の表示）調査

2020 年 12 月　Adobe Flash Player サポート終了

2021 年 3 月 （イ）〜（ニ）サーバ環境移行完了 *

* 移行先環境での不具合解決

2022 年 （イ）に中程度の脆弱性の指摘

2023 年 2 月　内包映像配信方式変更（Kaltura* → HLS**）

*2023 年 2 月提供終了

** 展示コンテンツ組み込み

2023 年 3 月末 （イ）〜（ニ）公開終了 *

* 情報環境機構「WEB ホスティングサービス」タイプ S 利用終了

注）うち（イ）のみ公開継続（映像ステーション限定版とも）

●かつての展示コンテンツ URL（現在無効）

（イ）http://exhibit.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ishibutai/

（ロ）http://exhibit.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/karakoram/

（ハ）http://exhibit.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/konoe_rondo/

（ニ）http://exhibit.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/mars/

※保存版（イ）は，サーバの文字列「http://exhibit.rra...ac.jp/」部分を「https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/exhibit/archived/」に置き換えると閲覧できる。

【参考文献】五島敏芳 , 戸田健太郎 . アーカイブ資料のオンライン展示継続の課題 . 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会報 . 2023, No.113, p.47-49. https://jsai.jp/pdf/113kaihou.pdf

総合博物館日誌（2023 年 7 月～ 10 月）

展示

▶スポット展示「魚の名前　いろいろな和名」
第 1 週 2023 年 8 月 9 日(水)～ 8 月 13 日(日)
＜哺乳類に由来する名前をもつ魚＞
第 2 週 2023 年 8 月 17 日(木)～ 8 月 20 日(日)
＜京都大学の魚研究者がつけた和名＞
第 3 週 2023 年 8 月 23 日(水)～ 8 月 27 日(日)
＜君が名前をつけよう！＞

子ども博物館・活動報告

実施回数：8 回
参加者数：子ども 132 名／中高生 10 名／大人 124 名
スタッフ（のべ）：26 名

レクチャーシリーズ

▶第 158 回　キリンの仔育てのいろは－タンザニアですすめる動物行動学－
齋藤美保（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）
2023 年 7 月 8 日（土）
▶第 159 回　チョウの他者認識を行動から探る
竹内　剛（大阪公立大学大学院農学研究科）
2023 年 9 月 9 日（土）

博物館セミナー

＊ Zoom および対面によるハイブリッド開催
▶第 126 回　博物館標本を用いたモグラ科の形態学的研究
岡部晋也（京都大学総合博物館）
2023 年 7 月 14 日（金）

イベント

▶京都千年天文学街道　第 41 回アストロトーク講演「天の川の向こうに広がる宇宙」
作花一志（京都情報大学院大学）
映像による講演「Mitaka で見る宇宙のすがた～太陽系外の天体～」
青木成一郎（京都大学大学院理学研究科附属天文台天文普及プロジェクト室／京都情報大学院大学）
2023 年 7 月 8 日（土）
▶京都大学オープンキャンパス 2023
（オンライン型と来場型の併用開催）
2023 年 8 月 9 日（水）～ 8 月 10 日（木）
［オンライン開催］
2023 年 7 月 19 日（水）～ 9 月 29 日（金）
▶ 2023 年度日本建築学会大会（近畿）　建築作品展
2023 年 9 月 13 日（水）～ 9 月 15 日（金）
▶第 11 回京都・大学ミュージアム連携　スタンプラリー
2023 年 9 月 23 日（土・祝）～ 2024 年 3 月 25 日（月）

協力イベント

▶京都市 留学生優待プログラム
「留学生おこしやす PASS」
2023 年 7 月 1 日（土）～ 8 月 31 日（木）
▶京都商工会議所 京都・観光文化検定試験合格者 施設優待企画
2023 年 9 月 1 日（金）～ 10 月 31 日（火）

展示協力（学術標本資料の貸出）

▶千葉県立中央博物館（1 点）千葉県誕生 150 周年記念事業・令和 5 年度特別展「よみがえるチバニアン期の古生物」
2023 年 7 月 15 日（土）～ 9 月 18 日（月･祝）
▶犬山城白帝文庫（2 点）特別展「家康・秀吉と成瀬正成」
2023 年 7 月 22 日（土）～ 9 月 3 日（日）
▶あいち朝日遺跡ミュージアム（1 点）企画展「弥生人といきもの 2023　魚をとろう！」
2023 年 7 月 22 日（土）～ 9 月 18 日（月･祝）
▶佐賀県立名護屋城博物館（4 点）開館 30 周年記念特別企画展「新時代へのかけはし－文禄・慶長の役から国交回復へ－」
2023 年 9 月 23 日（土･祝）～ 11 月 5 日（日）
▶観峰館（1 点）特別企画展「近江・聖徳太子伝承社寺の美術～地域に根付いた文化財たち～」
2023 年 9 月 23 日（土･祝）～ 11 月 26 日（日）
▶公益財団法人向日市埋蔵文化財センター（69 点）財団設立 35 周年記念特別展「古墳発掘 100 年　寺戸大塚」
＊京都大学総合博物館共催
2023 年 9 月 30 日（土）～ 11 月 26 日（日）
▶大阪城天守閣（5 点）特別展「上方の家康」
2023 年 10 月 7 日（土）～ 11 月 26 日（日）
▶野洲市歴史民俗博物館（8 点）開館 35 周年記念企画展「四面の鏡－海を越え、つながる王－」
2023 年 10 月 7 日（土）～ 11 月 26 日（日）
▶徳島市立徳島城博物館（2 点）特別展「阿波戦国絵巻－細川・三好・長宗我部・蜂須賀－」
2023 年 10 月 14 日（土）～ 11 月 26 日（日）
▶大山崎町歴史資料館（3 点）開館 30 周年記念　第 31 回企画展「記憶のなかの西観音寺－建立から廃仏毀釈まで－」
2023 年 10 月 21 日（土）～ 11 月 26 日（日）
▶福井県立歴史博物館（4 点）特別展「描かれた川と人々～越前・若狭の利水の歴史～」
2023 年 10 月 21 日（土）～ 11 月 26 日（日）
▶京都府立山城郷土資料館（108 点）令和 5 年度文化庁京都移転記念特別展「南山城の大型円墳とその時代－金比羅山古墳を中心に－」
2023 年 10 月 21 日（土）～ 12 月 10 日（日）

入館者数

12,499 名（うち特別観覧　44 団体，2,386 名）

京都大学総合博物館ニュースレター　ISSN 2758-0784
第 59 号　2023 年 12 月 27 日 発行
編集・発行：京都大学総合博物館
〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
電話：075-753-3272　FAX：075-753-3277
E-mail info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp
https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/
＊ニュースレターは，京都大学学術情報リポジトリ KURENAI でも公開しております。